

北水試 百年 こぼれ話

⑬ 高島本場はどこに建っていた？

田中 伊織

キーワード：北水試百年、高島本場、高島、小樽市、高島郷土館

はじめに

北海道において、1901（明治34）年12月、北海道水産試験場が現在の小樽市高島に創設されました。高島にあることから、当時、高島本場と呼ばれていました。その後、1931（昭和6）年7月、余市町の現在地に移転し今に至っています。

「北水試百周年記念誌」（2001（平成13）年）では、巻頭の写真の中に「北海道水産試験場高島本場全景」（写真1）が掲載されています。「北水試八十年の歩み」（1982（昭和57）年）にも同じ写真が掲載されています。しかし、これらの記念誌に、高島本場が現在の高島のどの場所に建っていたかということを示す情報は含まれていません。したがって、北水試の歴史の始まりの場所について特定し、資料として残しておくことは、きわめて重要なことです。

高島町会が示した高島本場の場所

「北水試百周年記念誌」作成以前、資料として高島本場が建っていた場所を示す具体的な記述は、高島小学校開校百周年記念協賛会が編集・発行した「新高島町史」（1986（昭和61）年）にあることが知られていました。新高島町史には、「水産試験場」が現在の「日根建設前」にあったこと、「川原さん宅」辺りに、建物の中に卓球をする部屋があったことが記されています。これによれば、祝津に向かう道道454号線の高島十字街にある、小樽信用金庫高島支店横を赤岩方面に向かう道路、「高島中

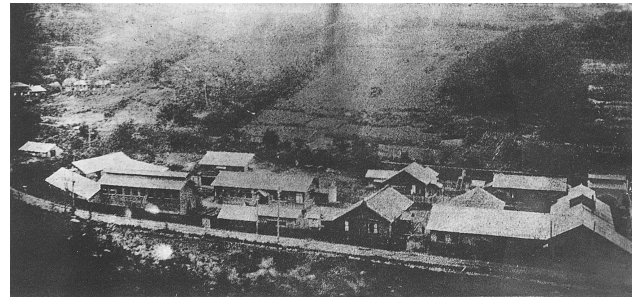


写真1 「北海道水産試験場高島本場全景」。北水試百周年記念誌（2001）から転載。

央線」の途中右手に該当する場所があります。

2010（平成22）年6月、小樽信用金庫高島支店内で高島町の歴史写真展がありました。そこを訪れ、各写真の説明文を見ていたところ、高島本場の場所は、「現在の佐藤ふとん店から川原さん宅の辺り」という記述を見つけました。これは新高島町史に記されている場所よりも赤岩側にずれた場所を指しています。しかし、そうすると新高島町史に記されている、「水産試験場」は「日根建設前」にあったという記述とは異なります。

その後、2006（平成18）年に新高島町史改訂増補版（増補再編集・発行：大黒昭氏）が発行されていたことを知り、内容を確認してみました。そこには、「旧校舎時代の運動会場」を示す図の中に「水産試験場」の場所が描かれていました。これが写真展にあった記述の根拠と思われます。ところが、新高島町史にも同じ「旧校舎時代の運動会場」を示す図がありますが、そこには「水産試験場」は描かれていません。残念なことに、この両者の違いが生まれた経緯についての情報は見当た

りません。

この新高島町史改訂増補版の巻末に、「高島郷土館」(管理者：沼田堅市氏)(<http://www17.tok2.com/home2/takashimakyodokan/index.html>)というホームページがあることが記載されています。そこで、ここを訪れて中を少し詳しく見ってみました。

高島本場の場所特定につながる歴史的写真資料

「高島郷土館」の中から、高島本場の場所特定につながる3枚の写真を見つけました。以下にそれぞれを詳しく考察しました。

「第3回町民文化祭 特別展示：高島むかし写真展」に「明治42年の運動会」(<http://www17.tok2.com/home2/takashimakyodokan/bunkasai04oldm.html>) (写真2)があります。これと同じ写真は「旧校舎時代の運動会(西館氏談の頃の運動会)」というタイトルで新高島町史改訂増補版にも掲載されています。運動会場の奥左手に、高島本場の右手海側の端にある建物が写っています。これは、写真1の右端に写っている建物です。この建物の背後直上すぐ右手に山の頂上が見えます。山の斜面には上から下まで段が作られ、山の中腹より上にある段は、山の左斜面にかかる部分で途切れています。山頂に近いところには、写真の右端に近いところまで地面が露出している斜面があり、日本刀の刃先を上に向けたような特徴のある形をしています。また、高島本場の奥側の建物の右脇には木製と思われる塀があります。敷地の境界に建てられたものと思われます。この塀は、建物より奥の上の段から建物の右脇に降り、さらに手前の建物右側にもう一段降りて建てられています。このことから、奥の建物は、背後の斜面にある一連の段の、一番下の段の上に建てられていることが分かります。さらに、写真右手奥の建物は、



写真2 「明治42年の運動会」。「高島郷土館」から許可を得て転載。矢印：地面が露出している部分。

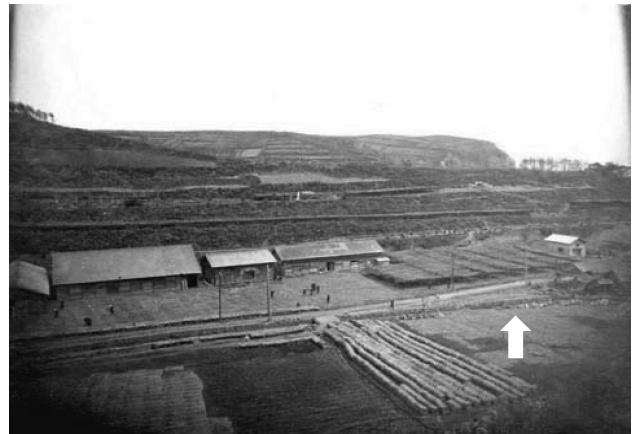


写真3 「NO.5メ粕乾燥」。「高島郷土館」から許可を得て転載。矢印：牛川の位置。その向こう側に高島中央線が白く見える。

この一番下の段の手前に建てられていることも分かります。この左の建物は、左右の中央よりやや右側に入り口が作られているという特徴がありません。また、右の建物と高さが同じです。

次に、「歴史セクション」の中には、「大正4年の高島のニシン漁」(<http://www17.tok2.com/home2/takashimakyodokan/taisonisin.html>)、があり、その中に「NO.5メ粕乾燥」というタイトルがつけられた写真3があります。写真2の6年後に撮影されています。海側に向かって牛川が高島中央線から右側に離れていくところが写っています。高島中央線の向こう側に建っている建物の背後の斜

面に段が作られていて、この段は写真の右端、高島稲荷神社の現在の社殿下あたりから尾根に沿って写真左端まで続いています。写真左側の斜面上部には、写真2と同じ形状の、地面が露出している斜面が見えます。その上の尾根の上左側に立木の列が見え、右端の木とその左隣の木の間隔がほかよりも広がっています。この木の並びの特徴は、写真2の山頂右手の尾根の上にかすかに見える立木の列の特徴と一致しています。また、写真左端から三つ目の建物は、背後の斜面上の、地面が露出している場所の右端手前に建っていること、入り口が左右の中央よりやや右側に作られた建物で、大きさと、さらに右隣の建物の屋根との高さも同じという、四つの特徴が一致することから、写真2に写っている建物であることが分かります。

そして、「第3回町民文化祭 特別展示：高島むかし写真展」の中にはもう1枚、「道立高島水産試験場」(写真4)があります。これは、小樽いろは堂発行の写真はがきです。新高島町史では、写真の上下をカットするようにトリミングされたものが「当時の高島水産試験場全景」というタイトルで掲載されています。ここでは高島本場前に電信柱が立っています。高島に電線が施設されたのは、新高島町史によると大正元(1912)年なので、明治42年以降、高島本場の建物の右に隣接して、斜面一番下の段に接するように、二つの建物が高島中央線と直交する向きに建設されたことがわかります。写真3の左端に写っている建物は、この写真4の右端の建物の一つと思われる。したがって、写真2には写真3の画面左側半分が写っていることが分かります。

以上のことから、建物およびその背後の地形を介して、写真2から写真4までをつなげて見ることが出来ます。その結果、高島本場の海側の端の建物の背後直上すぐ右手に見える山の頂上は、高



写真4 「道立高島水産試験場」。「高島郷土館」から許可を得て転載。

島稲荷神社から尾根伝いに左手赤岩側に向かって現れる最初の山の頂上であることが分かります。このように高島本場の海側の建物の位置に関する情報が得られました。「高島郷土館」の中にある歴史的写真資料の考察は以上です。

一方、赤岩側の端にある建物の位置について見てみます。写真4には高島本場の庁舎、実験棟、倉庫の建物群の赤岩側の端が写っています。左端に一部見える赤岩側に隣接して建っている建物は、「北海道水産試験場高島本場全景」が写されている写真1から見ると、住宅とみられます。写真1で高島本場の建物左端のところをよく見ると、赤岩方面に向かって、高島中央線が右側に屈曲していることが確認できます。この道路の屈曲点は、現在でも、川原家の赤岩側すぐ近くで確認できます。これから、高島本場の建物は、この高島中央線の屈曲点から海側に建っていたことが分かります。また同じ写真1を見ると、高島本場の建物より赤岩側に平屋の一軒家が写真の左端にポツンと建っています。この家のある場所が、現在の「佐藤ふとん店」の辺りになります。

ここまでの歴史的写真資料から得られた情報を総合して、当時の道路を基準に高島本場の位置を地図に描くと、図1のようにまとめることが出来ます。

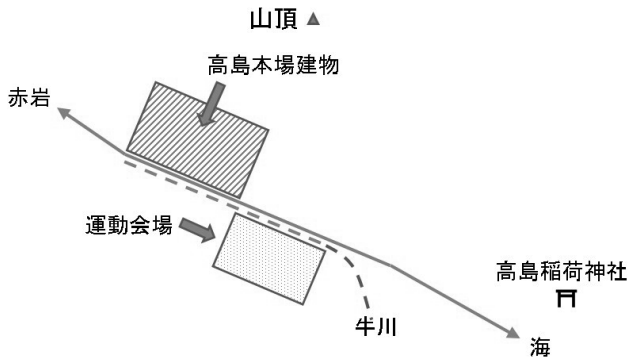


図1 歴史的写真資料から分かる高島本場建物の位置

高島本場の場所特定につながるほかの資料

以上の考察のほかに、高島の現地調査、「高島郷土館」の中にあるほかの資料調査、高島村役場が作成した資料の調査、のそれぞれの結果も含めて考察を行いました。

写真5は、「日根建設」の建物右手から高島中央線越しに高台寺参道を写したものです。真正面に山頂が見えます。頂上直下に三枚の白い大きな石板が立てられており、「鶴齡山」の文字が一文字ずつ刻まれています。この山頂は、高島稲荷神社から尾根伝いに赤岩側に向かって現れる最初の山の頂上です。その裏側に鶴齡山高台寺があります。これまでの考察で、高島本場の海側の端にある建物の背後直上すぐ右手に頂上があったことに照らし合わせると、高島本場は高台寺参道の左側に隣接していたことが分かります。したがって、この写真は、新高島町史にある「現在日根建設さんの向かいに道立小樽高島水産試験場があり」という記述が正しいことを示しています。

写真6は、高台寺参道を見るように、高島中央線を赤岩方面に向かって写したものです。高島中央線の突き当たりで道路が右に屈曲しています。また、高台寺参道の看板手前右手には高島町会の駐車場が見えます。この駐車場の中に、かつて旧吉田医院（後に西島医院）の建物が建っていました（「高島郷土館」歴史的建造物 NO.2旧吉田医



写真5 「日根建設」の建物右手から高島中央線越しに見た高台寺参道。撮影日：2016年11月14日。



写真6 高台寺参道を見るように、高島中央線を赤岩方面に向かって撮影。撮影日：2016年12月4日。道路左側を流れる牛川は暗渠になって流雪溝として利用されている。

院／現吉田宅、(<http://www17.tok2.com/home2/takashimakyodokan/rekiken.html#no.2>)。吉田医院は「上棟：大正12（1923）年9月11日」（「高島郷土館」歴史的建造物 No.1吉田医院、(<http://www17.tok2.com/home2/takashimakyodokan/rekiken.html#no.2>)) で、高島本場が建っていたときに建設されました。建物は平成17（2005）年12月に解体されました（「高島郷土館」歴史セッション平成の街並み NO.5旧吉田医院（元西島医院）解体、(http://www17.tok2.com/home2/takashimakyodokan/machi_heisei.html)) が、駐車場入り口すぐ右手の道路端に、当時の医院の正面玄関に通じるコンクリートスロープの一部が今も残っています（写真6）。「昭和32年の高島町の地図」（「高島郷土館」第4回町民文化祭特別展示『高島むかし生活展』、

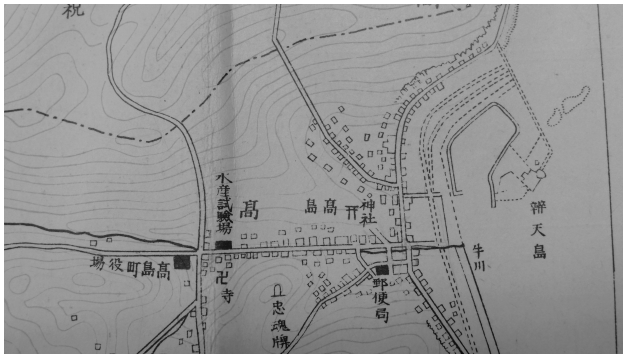


写真7 高島本場の位置を示す地図。高島町役場発行による大正15年7月編纂の高島町勢要覧から一部分を抜粋。



写真8 「正林寺」本堂前から高島中央線をはさんで向かい側の尾根を見たところ。撮影日：2016年11月14日。

(<http://www17.tok2.com/home2/takashimakyo-dokan/bunkasai05oldlife.html>)を見ると、西島医院の敷地は高台寺参道に接しており、敷地全体が現在の駐車場になったことが分かります。したがって、吉田医院は高島本場の隣に建設されたことが分かります。

最後に、小樽市立図書館の協力を得て、高島本場があった時代に作成された地図を調べました。高島本場の位置が描かれている最も古いものとして、高島町役場発行による大正15（1926）年7月編纂の高島町勢要覧（写真7）がありました。これを見ると、等高線が入っている地図の中に、高島本場は高島町役場のすぐ近く、梅雲山正林寺か

ら見て、高島中央線の向こう側の真向かいに描かれています。写真8は、現地調査で正林寺本堂前から高島中央線をはさんで向かい側の尾根を見るように写したものです。右側に鶴齢山の石板二枚が見えます。写真中央左にある正林寺本堂下の参道が、高島中央線と交差するところの向こう側右手隣り、すなわち高島中央線をはさんだ正林寺本堂正面に、この写真では見えませんが、「佐藤ふとん店」があります。この高島町勢要覧によれば、「佐藤ふとん店」のあたりに高島本場があったこととなります。しかし、これまでの考察で、高島本場の建物はもっと海側にずれて建っていたことが明らかです。つまり、この地図上の位置と実際

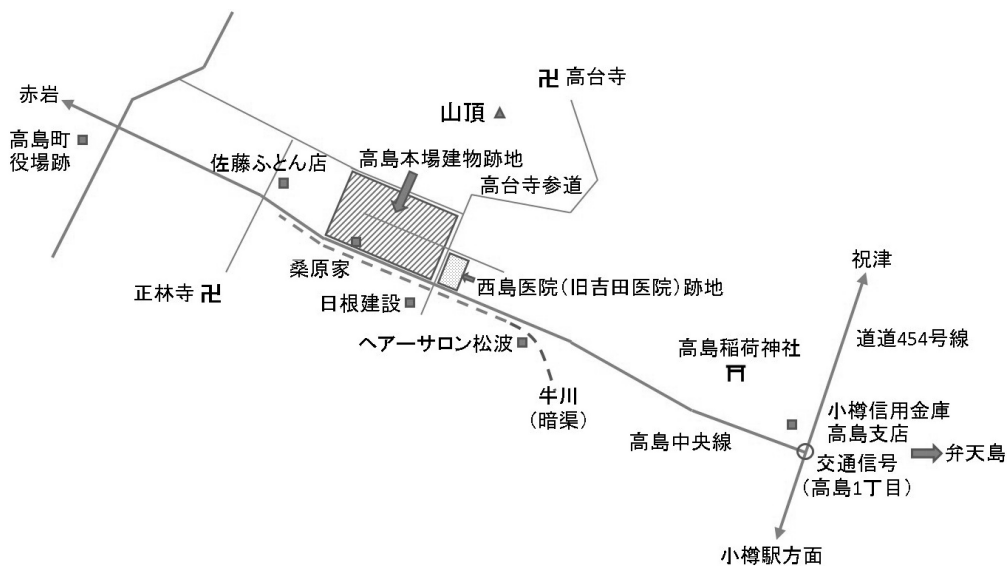


図2 現在の道路地図上に投影した高島本場建物跡地の位置

の位置には不整合があります。

「佐藤ふとん店」から、さらに海側にある高島中央線の屈曲点までの空間は、「北海道水産試験場高島本場全景」と題する写真1に写されていることから、この空間も高島本場の敷地であった可能性があります。もしそうであれば、地図上で正林寺真向かいに高島本場が描かれていても不思議ではありません。しかし残念ながら、この不整合の問題は現時点で解決することができません。

高島本場が建っていた場所

以上のすべてを総合し、高島本場の建物が建っていた場所を現在の道路地図上に投影して描くと図2のようになります。「佐藤ふとん店」から高台寺参道までの間は、現在の住居表示で小樽市高島

3丁目17番地に該当します。したがって、高島本場は現在の小樽市高島3丁目17番地の中にあり、高島本場の建物は高台寺参道から高島中央線の屈曲点までの間に建っていた、という結論になります。なお、高島本場が建っていたこの一画付近には、当時の建物背後の斜面にあった一連の段の最下段の地形が今も残っていることを付記します。

おわりに

ホームページ上の資料の引用、写真転載を許可して下さった、高島町出身の「高島郷土館」管理者・沼田堅市氏に対し、ここに記して感謝します。

(たなかいおり 道総研フェロー 元中央水試

報文番号 B2417)